



気になる言葉

時折、子ども同士で話している場面を見ていると、略語や造語など、流行の言葉を面白がってまねしていることがあります。また、言葉遣いが荒かったり、望ましくない言葉を使ったりしているときもあります。子どもたちは、テレビやゲーム、友達や兄弟、周りにいる大人などが使った言葉を聞いて覚えるのでしょう。子どもの言葉は、今まで聞いた言葉で構成されていきます。

子どもたちが、気になる言葉のやり取りをした時には、周りにいる大人が、望ましい言葉の使い方や、使ってはいけない言葉があることについて、その場を逃さずに伝えることが必要です。「聞き逃す」ということは、その言葉を「使ってもいい」と示していることになるからです。「あの言葉は気になる。」「使ってほしくない。」と感じた時には、その気持ちを伝えていきたいものです。これは、我が子に限らず、他の子が使う言葉についても同じように、自分事と思って見逃さずに伝えていくと、それを見ている我が子にとっても、親の考えに触れることになり、結果的に自分の子どもにも返っていくことになります。

しかし、子どもに、「何言っているの。」「やめなさい。」などと、感情的に叱っただけでは、伝わりにくいものです。使ってはいけない言葉についての理由や、その言葉を使うことで周りの人がどんな気持ちになるかについてなど、分かりやすく伝える必要があります。ここで大切なのは、子どもが、自分が言った言葉を振り返り、「言わないほうがよかった。」と思えるかどうかということです。

幼稚園では、荒い言葉遣いや望ましくない言葉については、理由を示して「使ってはいけない。」ことをはっきりと知らせています。その場ですぐに今のこの言葉について、振り返り、自分の気持ちを掘り下げていきます。けんか中に、感情が抑えきれずに使った言葉については、「何故その言葉を使ってしまったのか。」を振り返ります。子どもの気持ちを受け止めて、「言いたかったことは、〇〇ですね。〇〇と言ったほうが、優しい言い方で、友達にも伝わりますね。」などと、他の言い方を具体的に知らせています。また、人を傷つけるような言葉を使った時には、相手の表情に気付くように声をかけたり、その言葉を言われた相手が、どのような嫌な思いをしていたのかを振り返ったりできるようにします。言われた相手の気持ちを想像することは、人と関わる上でとても重要なことです。想像する力は、物事が起こった時のことをもう一度丁寧に振り返ることで育まれます。「いつも優しい〇ちゃんなのに、間違えて使ってしまったのかな。」と、助け舟を出すこともあります。頭ごなしに叱られるよりも、「本当は分かっているのよね。」と、「なりたい自分」を思い起こせるようにしたほうが、「しまった。今度はやめよう。」と思うようです。「今度は、その言葉を使わないと信じていていいですか。」と伝えると頷き、子どもは、自分から直そうとします。子どもの心に響く伝え方をしていくことが必要です。

とはいえ、子どもに「人の気持ちを考えなさい。」「自分がされたらどうなの?」と伝えて、子どもが返事をしたとしても、心に響いていないことがあります。人の気持ちを思い浮かべて、自分がそうだったら嫌だと思えることは、幼児にとってなかなか難しいことです。子どもと一緒に、「ああかな?こうかな?」と思い巡らすことが大切です。「悲しい顔をしていたね。」「きっと〇〇と思っているかな。」と、相手の気持ちを代弁して伝え、その言葉を使うことは、どうだったのかと、子ども自身が自分で考えることができるように話題に挙げる必要があります。近くにいる大人は、どのような人に育ててほしいかを思い浮かべながら、真剣に、分かりやすく伝えることで、子どもの心に響いていくのです。

地域の公園などで子どもたちが遊んでいるときに、どう伝えようか悩むことがあります。気になる言葉を使った時は、子どもが言葉を学ぶ大切な瞬間です。自分の子も他の家の子も、気になる言葉を使った時には、みんなで育てる意識をもちたいものです。このふくろ幼稚園のPTAは、それができるコミュニティだと信じています。言葉を学ぶ今だからこそ、「みんな我が子」と言う気持ちで、子どもが分かるように、気になる言葉は、その場で望ましい言葉の使い方を知らせ、豊かな言葉を学べるように支えていきたいと思います。